（５）まくわうり

※成熟した果実を収穫するものであり、未成熟な果実を収穫する漬物用まくわうりとは別である。

防除法 病害虫名	防除のポイント	薬剤防除 防除時期	RACコード	薬剤
1 苗立枯病 *Rhizoctonia solani*	1.床土は排水のよい無病のものを使う。 2.苗床の温度管理に注意し、急激な温度変化を避ける。 3.換気を良好にし、床内を乾かす。			
2 つる割病 *Fusarium oxysporum* f.sp.*melonis*	1.白菊座、新土佐系カボチャに接木する。 2.耐病性品種を用いて畑は５～６年、水田は２～３年以上輪作する、 3.石灰質肥料を施し、土壌酸度を矯正する。 **〈薬剤使用の特記事項〉** 1.土壌消毒方法はⅢ－１４．土壌病害虫の防除の項参照。 2.発病後は有効な防除薬剤がない。	土壌消毒	－ － －	クロールピクリン ドロクロール クロルピクリン錠剤
3 炭疽病 *Colletotrichum orbiculare* べと病 *Pseudoperonospora cubensis*	1.発病苗は本圃に持ち込まない。 2.ポリマルチをする。 3.草勢の維持管理に努める。 4.日射、通風を良好にするため、適度の摘葉を行う。 5.多湿条件で発病しやすいので、湿度管理に注意する。			
4 つる枯病 *Didymella bryoniae*	1.連作を避ける。 2.ポリマルチや敷わらを行う。 3.排水を良好にする。 4.発病苗は本圃の伝染源となるので植えない。 5.窒素過多は発病を助長する。 6.被害植物のついた支柱やハウス資材はよく消毒する。 7.被害茎葉は除去し、処分する。 〈薬剤使用の特記事項〉 1.トップジンMペーストを接木部に塗布する場合は、活着後に行う。	発病初期	1	トップジンMペースト
5 疫病 *Phytophthora nicotianae* var.*parasitica*	1.連作を避ける。 2.ポリマルチや敷わらを行う。 3.高畝にして、浅植えする。 4.被害植物のついた支柱やハウス資材はよく消毒する。 5.発病苗は本圃の伝染源となるので植えない。 6.窒素過多は発病を助長する。 7.排水を良好にし、溝の潅漑水を茎葉にかけない。 8.被害茎葉は除去し、処分する。			
6 うどんこ病 *Sphaerotheca cucurbitae*	1.生育後半には老化した下葉を摘除し、通風と採光を図る。 2.収穫後の植物残さは圃場に放置せず、早めに処分する。 3.肥切れを避ける。	発病初期から	M10	モレスタン水和剤
7 アブラムシ類 （モザイク病 ＣＭＶ）	1.苗床及び本畑周辺の発病株を取り除く。 2.圃場の周辺に防虫ネット（１㎜目合以下）を高さ1.3ｍぐらいにはったり、シルバーマルチ、シルバーテープを行うとアブラムシ類の飛来が少ない。 3.発病株は早めに処分する。	定植時	4A	アドマイヤー１粒剤
		発病初期	4A 4A	アルバリン顆粒水溶剤 スタークル顆粒水溶剤
8 タネバエ	1.成虫は有機物の腐敗臭に誘引されるので注意する。 2.レタス、ハクサイ、キャベツ等の残根を処分する。			